

あこがれの先輩

校 長 武井 正明

吉中は今、仮入部期間の真っ最中。様々な部活動で、先輩たちが、後輩たちに優しく、手取り足取り教えてあげている姿は、なんとも微笑ましい。

自分の時と言ったら…。

まず先輩の1個上に、やたら先輩風を吹かせるのがいた。自分も生意気で体が大きかったから、すぐ目を付けられた。「おめえ、いい気になってんじゃねえぞ」と威嚇される。今の吉中からは、信じ難い世界だ。そして、おきまりの意味不明の声出しと外周20周約7キロを毎回。朝から憂鬱、雨乞いの日々だった。

ただそれだけじゃない。自分自身の性格にも大いに問題があった。中途半端な天才肌気取りのサボり癖。しかも、いいところ取り。自分より勉強ができない人や野球がヘタな人をバカにする。これで、誰からも信用されるわけがない。本当にイヤな奴だった。

そんな自分にも、あこがれの先輩がいた。

坂井輪中のエースピッチャー。とにかくカッコよかった。オーバースローで振り下ろした真っ直ぐは「シューッ」と音を立てて、キャッチャーミットに吸い込まれていく。

そして、誰に対しても穏やかで、優しい笑顔。女子にも人気があった。野球、人格、見た目、どれをとっても一級品。自分には絶対になれない、まさに雲の上の存在。

自分のような1年生にも、一度練習後の部室で「タケイ、頑張ってるか？」なんて、名前で声を掛けてもらった。普通、先輩が後輩を呼ぶ時は、「オイ」下手すると「じゃま」だ。声を掛けてもらえるなんて思ってもみないから、嬉しくってもう気をつけの直立不動。頑張ってもいないのに「ハイッ!!」これがまあ、1個上から見たら「チョーシン乗ってんじゃねえぞ」ってなるわけだ。

その青池善浩先輩は新潟工業で見事、新潟県代表として甲子園に出場するのだ。

当時、私は高校1年の暗黒時代。野球もやらず、帰宅部、ぼんやりした日々。

宮崎代表の都城高に3-4、先制するも、追いつかれ突き放された、惜しい敗戦だった。

しかし、青池先輩の、黒土の甲子園マウンドに映える、凛々しい立ち姿は、今も色褪せず、私の脳裏にしっかり刻まれている。暗黒の中の希望の光だった。すごいなあ、青池先輩…。あこがれの青池先輩は、テレビの中でも、やっぱりカッコいい青池先輩だった。

吉中の人たちも、ぜひ青池先輩みたいな、あこがれの存在になってほしいな。